

BATTLE BALLER

HARUKA

III

氷の美少女

3 失踪

Ψ

(Eternity Flame)

バトルボーラーはるか

第二集

氷の美少女

第3章

失踪

作・Ψ(Eternity Flame)

夜空より秀樹へと差し込む光。どうやらその光の先に敵がいるようであった。水ホテルと通信をし終えた秀樹が正友を呼んだ。

「俺とお前で行くぞ！」

昨日の男達が仲間を引き連れて来たようで水ホテルから無数の反応があったが、詩音の事が気になるので、ガードに十分な人員を割(さ)く必要を感じ、用心深(ようじんぶか)い秀樹は少し抵抗(ていこう)があったが、正友との少数精鋭(せいえい)で空にたむろする男達の元へ行く決心をしていた。

「へへへ...楽しみだなあ。」

「おい、正友。遊びに行くんじゃないんだぞ！」

「分かってるよ。“話し合い”に行くんだろ？は・な・死合(しあい)にな。」

「なんかお前のその言い方にはトゲがあるな。いいか！絶対に軽率(けいそつ)な行動は慎(つ)つしむんだぞ！」

正友の口調(くちょう)は、明らかに拳(こぶし)と拳(こぶし)での“語り合い”という含(ふく)みが込められており、秀樹は心配であったが、相手に話しが通じないのも薄々(うすうす)は分かっているようで、相手側に囲まれた時に、自分の背中を預けられるのも彼しかいないのも事実であった。

「お兄ちゃん、二人で大丈夫なの？」

正友の頼(たよ)りなくチャラチャラした一面が目立つばかりに、真面目(まじめ)なはるかは秀樹を案(あん)じている。

「オレと秀さんが組んだらフリーザだって倒せるぜ！心配すんな。」

「フリーザ？何よソレ？こんな時までワケの分かんないコト言わないでよ！」

根拠(こんきょ)のない自信を見せる正友。しかし、いざという時には素早く反応し、対応する実戦向きの正友の能力は秀樹にはない物であり。油断(ゆだん)ならないワナがあるかも知れない未知の領域(りょういき)に踏み込むには、彼の力に頼る所が大きいと秀樹は思っていた。

「とにかく俺達の心配はいいから、お前は功一や広介達と詩音ちゃんを守れ。いいな！」

「うん、分かったわ。気を付けてね、お兄ちゃん！」

「正友も頑張ってる！」

「“も”は何だよ！なんか扱いが低いぞ！」

二人がまた口論(こうろん)になる前に、秀樹は先手を打ってケルビムを召喚(しょうかん)し、さっさと空へと飛び発った。

「あっ!?てくれよ、秀さん。」

正友も慌(あわ)てて銀竜に乗り、秀樹の後を追った。厚い雲(くも)の壁を突き抜けると、月明かりが眩(まぶ)しいくらいに照らす上空に、大きな島のような物が浮かんでいて、月明かりに島影が宝石のように乱(らん)反射(はんしゃ)している。

「水晶(すいしょう)ででもできてるのか？」

「秀さん、ありゃー氷じゃね？」

数百メートルにまで近付いて見ると、正友の指摘(してき)通りであった。

「な！オレの言った通りだろ？」

「ああ。しかし...デカイな。」

「ラピュタは本当にあったんだね！」

「バカッ...んな時までフザけるな！」

「へへへ...冗談(じょうだん)だよ。さ、さっそく“はな死(話し)合い”行こうぜ！」

「ああ...。」

巨大な島にどれだけの猛者達(もさたち)がいるのか。秀樹は水ホタルの反応を探っているのに気を取られ、思わず正友の言葉に相槌(あいづち)を打つと、正友はそれが合図だと思い込み、銀竜を飛ばして島へ接近して行った。

「オラーッ、讃岐(さぬき)の山ピーこと正友様が話し合いに来てやったぞ！」

派手(はで)な名乗りをあげ、正友が氷の島に降り立った。

「バカッ。忍(しの)び込むって言っただろ！！」

後から追って来た秀樹がそう言って正友を叱(しか)った。

「ああ、ゴメンゴメン。」

「お前、そんな軽いノリで...一体、何考えてんだよ!!」

「大丈夫だって。オレは目が良いからさ。奴(やっこ)さん達数えたんだけど、せいぜい十数匹ぐらいたったぜ!オレ達なら全然問題ない数だろ?」

「うーん...だが、相手の実力が分からないじゃないか?」

「んなのオレ達に比べりゃ大した事ないって、いざという時には強力な助っ人を準備してるからさ。」

「助っ人?」

「おう。はるか達の事もソイツらに見張ってもらってるし、まあ遊撃隊(ゆうげきたい)みたいなモンだな。」

「...そうなのか。」

「そうそう。いつまでもココにいるより、さっさと片付けないと、はるか達が心配だろ?」

「...まあ、そりゃ心配だが...。」

「だろ!まあオレに任せてみなさいって。」

「...そうか。」

いつもと立場が逆転しているのに秀樹は戸惑(とまど)ったが、正友の言う事も一理(いちり)あったし、彼も成長しているのだと思い、同意すると一

「オラオラッ出て来い!!話し合いに来てやったって言ってんだろが。」

と、いきなり交戦的な大声で叫び出した。言葉尻では秀樹の指示通りだが、態度は全くの逆で戦う気満々であり、秀樹は頭を抱えたくなくなってしまったが、言葉をフィードバックもできないので、相手の出方を伺(うかが)っていた。

正友が遠い前方に人影を発見し、ケルビムを呼び戻すと一気にそこへ向かった。

秀樹もその後を追うと、冰山(ひょうざん)が幾(いく)つも連なる島の中央部にまで入り込んでいた。

「これは...!?!」

冰山(ひょうざん)にはナウマン象や様々な氷河(ひょうが)時代(じだい)の巨大な動物達が、化石のように氷漬(ひょうぢ)けにされていて、秀樹を驚(おどろ)かせていた。

「ようこそ、我らが氷の城へ！」

「誰だ貴様!？」

正友の呼びかけに姿を現した声の主。何の動物かは分からないが毛皮を着込み、ビッグフットにも劣(おと)らぬがっしりとした体格の男であった。

「私は松志田。氷の四天王の一人に数えられる者です。」

「そうか、アンタが偉(えら)いさんか。なら話は早え。おい、詩音ちゃんから手を引け！」

正友の命令口調(めいれいくちょう)にも、松志田と名乗る男は全く動じずー

「それは出来ませんな。」とだけ答えた。

「何だと~!？」

「おやおや~どうやら自分達の立場が分かっていないようすな~。」

松志田の含みのある言動はハツタリなのか。それとも自分の力によほどの自信があるのか、その真意がはっきりしない内に動くのは早計(そうけい)なので、今にも飛び掛りそうな正友を秀樹が抑え、話し合いのテーブルになんとか松志田をつかせようとしたのだが...

「!？」

秀樹は背中に寒気を感じた。慌(あわ)てて後ろを振り向くと、顔の近くまで斧(おの)が襲(おそ)つてきていた。

秀樹の異変に正友も気付く。正友は振り向く事はせず、とっさの判断で横に逃れたが、秀樹は頬(ほほ)にカスリ傷を負っていた。二人を襲った何者かは、秀樹と正友を仕留め損なったが深負いはせず、後方に引き退っていた。

「フフフ。よく躲(かわ)したな。」

「貴様...これが答えか？」

かなり怒っている様子 of 秀樹。嫌な笑みを浮かべる松志田を睨(にら)みつけた。松志田は余裕(よゆう)で、その視線を高い所から見下ろしている。

「秀さん、オレ達を襲った昨日のヤツらだ。」

「ああ。俺も一瞬だが、真正面から襲ってきた奴の顔を見たから分かってる...どうやら話し合う余地(よち)はないみたいだな。」

互いに背中を預けあって話し合う二人。

「フフフ。我ら氷の一族は寒冷地(かんれいち)であればある程、その能力は高くなる。雪と氷に覆(おお)われた大地で、貴殿(きでん)らは戦った事などあるまい。」

確かに秀樹と正友がこうもあっさりと後ろを取られたのは前例がない。想像以上の強敵に二人は緊張(きんちょう)をしていた。

黙(だま)り込む二人に更(さら)に強気になった松志田が、勝ち誇(ほこ)るかのように話しを続けた。

「我らの気配が貴殿(きでん)には読めぬであろうが、我らには貴殿らの行動は筒拔(つつぬ)けだ。どこから襲(おそ)われるか分からぬ恐怖(きょうふ)におびえながら死ぬがいい。」

松志田がそう言うと、辺り一帯を猛(もう)吹雪(ふぶき)が包んだ。秀樹はおろか、ずば抜けて目のいい正友の視界(しかい)さえ行き届かぬ閉ざされた氷の世界。その吹雪(ふぶき)の中をくぐり抜け、弓矢(ゆみや)が二人を的確(てきかく)に襲(おそ)ってくる。

「どうしてオレ達の居場所が分かるんだ!?!...」

弓矢を放っているのは臂力(りよりよく)からして、昨日、返り討(うち)にしたビッグフッドだと想像がついた。

しかし、自分達には敵の居場所が分からないのに、どうして向こうには分かるのか。正友にはそれがさっぱり分からず、躲(かわ)しながら上ずった声でそう言うと、矢は増々もって狙(ねら)いの精度(せいど)を上げてきた。

正友と秀樹の二人はどちらも混乱(こんらん)の度合いを深めている。その混乱(こんらん)の中にあって同じ必至(ひっし)の二人であっても、正友とは対照的に秀樹はただ静かに躲(かわ)し続けているだけであった。

「フハハハハッ。さっきの威勢(いせい)はどうしました?いつまで二人仲良くダンスを踊ってるつもりですか?」

松志田の挑発(ちょうはつ)に正友が怒り、内力(メキド)で翼(つばさ)を生やして松志田の元へ向かおうとすると、矢のかっこうの的となり、何とか重傷は免(まぬ)れたが肩口(かたぐち)から血を流していた。

「やろ～...!」

正友は片(かた)膝(ひざ)をつくと、ドスの利いた声でそう言い、松志田の影(かげ)のいるらしき先を睨(にら)んだが、それとて定(さだ)かではない程に視界は遮(さえぎ)られていた。

正友は怒りで我を忘れていたので気づかなかったが、今が自分を仕留めるのに絶好(ぜっこう)のチャンスなのに、矢が襲(おそ)ってこない不思議(ふしぎ)さに遅れて気付き、秀樹の動きを感じなくなったので見ると自分の隣(となり)でじっとしていた。こちらも矢に襲われておらず、動かなければ狙われない事をようやく悟(さと)った正友。

二人して彫像(ちょうぞう)のように動きを止めていた。そして、聴勁(ちょうけい)を応用したテレパシーで意志の疎通(そつう)を図る事にした。

「どうなってんだ？秀さん。」

「詳(くわ)しい事は分からんが、どうやら奴らは大地の震動(しんどう)を感じて俺達の位置を探し当てているようだな。」

「んで、これからどうすんの？」

「...まあ、もう少し様子を見てみよう。」

正友も秀樹も相手のカラクリの全てとまでは行かないが、少なくとも人智(じんち)を超(こ)えるような代物(しろもの)ではないと分かったので、もうしばらく出方を見るようにしていた。

「フハハハッ。どうやらこの氷結の牢獄(プリズン・ブリザード)の前に手も足も出ぬようだな。このまま動かなければ、寒さで凍死(とうし)するぞ!!」

松志田の言う通り。このまま身動きを取らずにいれば、凍(こご)え死んでしまうのみであった。松志田は勝ったと思ったのか、段々と口調が荒くなり本性を見せ始めていた。

「言いたい事はそれだけか？」

秀樹は静かに松志田にそう言った。

「何ッ!? 貴様、この状況(じょうきょう)で気が狂(くる)ったか？」

松志田には、秀樹の自信に満(み)ちた言葉の意味が呑み込めていない。しかし、松志田は猛吹雪(もうふぶき)の荒(あら)ぶ風の牢獄(ろうごく)から何故(なぜ)、秀樹の静かな話し声が自分の耳元に入ったのだろうと考えた時「はっ」とした。

「貴様、ドコから声を...!？」

「ここだよバーカ！」

松志田の左側の耳元に、正友の声と気配がした。どうやって自分の真隣りに現れたのか、松志田は気が動転したが、確かに正友の気配がした。

何とかせねばと考えようとしたが、そんな猶予(ゆうよ)を正友が与える訳もなく、まともに蹴(け)りを受けてしまっていた。強烈(きょうれつ)な痛みにも悶(もだ)えながら吹き飛ばされた松志田。

更にその吹き飛ばされた先には秀樹が待ち構えていて、ラグナセイバーで渾身(こんしん)の一撃を松志田の顔に浴(あ)びせた。

「“借(か)り”は返させてもらったぞ！」

さっき頬(ほほ)に傷を負わされたのがよほど頭に來たのか、秀樹が珍(め)ずらしく報復(ほうふく)を口にした。

「ヒャハハハハ...高(たか)くついたな。」

ボロボロになって蹲(うずくま)る松志田を見て、正友が笑いながらそう言った。

「ゴフッ...どうやってこの氷結(ひょうけつ)の牢獄(プリズン・ブリザード)を打ち破(やぶ)った...？」

松志田の言葉に一

「そんな事をいちいちお前に説明する理由はない。」

と、そっけなく答える秀樹。その実はこうであった。松志田が絶対的(ぜったいてき)な力を行使(こうし)したかに見えた氷結(ひょうけつ)の牢獄。

彼の自信には、二段構えの仕組みがあつて、その一つは動けば遠距離からの強烈(きょうれつ)な弓矢(ゆみや)の攻撃で迎(むか)え、もう一つは猛烈(もうれつ)な吹雪(ふぶき)の渦(うず)で、その風の気流には触(ふ)れた物を一瞬(いつしゆん)で凍(こ)らせてしまうほどの威力(いりよく)があつた。

松志田がどうやってこの風を作り出したかは分からなかったが、風に変わりはなく、風を操(あやつ)る正友がそこに穴を作る事などは造作(ぞうさ)もない事であった。秀樹と正友はテレパシーを使ってやりとりをし、タイミングを見計って穴へ飛び込んで脱出をしたのである。

弓矢で待ち構えていたビッグフッドはと言うと、松志田の技を抜け出した瞬間(しゅんかん)に目視(もくし)できていれば狙(ねら)えもしたが、あまりにも二人のスピードに、二人が抜け出した事さえ気づいていなかったという訳(わけ)である。

いつもの秀樹なら長々と説明をして、相手に引き退くように仕向けるのだが。早々(そうそう)にぶちのめしたのは、詩音の事も気になっていたというのもあるが、何よりも不意打(ふいう)ちを喰(く)らわされたのが気に入らないでいるようであった。

「秀さん怖エ〜…おい、お前。二度とオレ達の前に現れないように約束しろ！そうしたら許してやるからよ。」

正友がこちらも珍(めずら)しく温情(おんじょう)をかけたが。

「…殺してやる。」

と、正友の言葉をつっぱね。それどころか松志田は復讐心(ふくしゅうしん)に満ち溢(あふ)れる発言をした。

「…んだとコラァァアツ!!」

激昂(げっこう)した正友が、松志田を殴(なぐ)ろうと歩を進めたが、鋭利(えいり)な刃物が風を裂(さ)くような音を感知し、のけぞらされていた。

「フフフ。よくぞ我が氷の刃(アイスニードル)を躲(かわ)したな。」

「誰だお前は？」

「我は氷の四天王が一人、武内(たけうち)だ！」

新たな敵の出現に、松志田を殴(なぐ)る邪魔(じゃま)立(だ)てをされ苛立つ(いらだ)正友。彼は足元に冷気を感じたのでそちらに目を向けると、アイスニードルの突き立った大地が凍りついていた。

「貴様(きさま)も内力(メキド)を使うのか？」

「フッ、これから死にゆく貴様(きさま)らだ。教えても無駄(むだ)だろうが、我らの先代の王はメキド(内力)の継承者(けいしょうしゃ)がいない為(ため)、一時的にその力を我ら四天王に分割(ぶんかつ)なされたのだ。」

正友の問いかけに武内はそう答えた。

「メキド(内力)を分割!?!...秀さん、そんな事できるのかよ？」

「まあ...出来るんだらうな。ヤツらは俺達とは少し体の特徴(とくちょう)とかも違ってるしな。」

「...そっか。」

「だがメキド(内力)の力が半減とまでは行かないとしても、俺達よりも劣(おと)っているのは確かな筈(はず)だ。それで俺達と互角(ごかく)以上に戦えると思ってるのか？」

秀樹がそう言って武内を見つめるとー

「分かっておらぬのは貴様らだ、我らにはスノータイガーにビッグフッドがいる。それに血筋がだいぶん薄れてはいるが手下供もな。」

と、武内は言い。それらと呼ぼうとしたのだが...

「バーカ！お前等こそ気づいてねーってんだよ！」

と、正友が馬鹿(ばか)に仕返した。

「何だと!?!」

「味方がいるのはお前達だけじゃねえってコトだよ。アレを見ろッ！！」

正友が空を指さしたので武内がその方向を見ると、仮面をつけた男と女が大きなプロペラのような物を頭上に回しながら飛んでいて、その場へと降りてきた。

「あっ...つ、月影の扇風(せんぷう)ナイト参上(さんじょう)。」

マスクの男は降り立つと、オドオドした声でそう名乗った。手には拳法(けんぽう)の棒術に使うような棒を持っていて、どうやらそれを高回転させながら空を飛んできたようであった。

女の方は恥(は)ずかしがって名乗りはしなかったが、体型や髪型を見た秀樹には、正友が助っ人として準備していた二人の男女の素性(すじょう)は一目瞭然(おちもくりようぜん)であった。

「おお、待ってました！正義の味方“月影の扇風(せんぷう)ナイト”さん。オレ達、清(きよ)く正しい青年の窮地(きゅうち)を見て助けに来てくれたんツスね！」

と、自分からけしかけといて白々(しらじら)しい芝居(しばい)をする正友。

「あ、ああ...う、うん。」

名乗る所までしか打ち合わせをしていなかったのか、正友の唐突(とうとつ)な演技に戸惑(とまど)い、ひどく言葉のドモる男。

「大介と沙織ちゃんだろ？」

秀樹はあっさり二人が誰なのかを言い当てた。

「どうして分かったんだ？」

見え見えの芝居をさせておいて、そんな事を言う正友。秀樹は馬鹿らしくて、ツっ込む気も失せてしまっているようすであった。

「ちえっ...秀さん、ノリが悪いなー。ま、いいや。そんなこんなで月影の扇風ナイトさん達が、お前ら悪者の手下を倒したとよ。」

正友の言葉通り。大介と沙織は二人して、ビッグフットやスノータイガー達を駆逐(くちく)していた。秀樹は正友の妙な芝居にはシラけながらも、遊軍(ゆうぐん)として大介と沙織を段取っていた正友の用意周到(よういしゅうとう)さには感心していた。

特に沙織などは、ジャン・ピエールに翻弄(ほんろう)されていた時と比べると格段に強くなるようで、そうでないと大介と共に戦う事などは出来ない筈であり。しっかりとこういう時の為(ため)に正友が鍛(きた)えていたのは想像に固くなかった。

「くっ…」

宛(あ)てが外れて焦(あせ)る武内。

「おいおい、さっきの威勢(いせい)はどうしたんだ？今からチョーシこいてくれたお礼をたっぷりとしてやるから覚悟(かくご)しろよ！」

焦(あせ)りおののく武内と手負いの松志田に対し、サディスティックな正友の目を輝(かがや)かせながらの言葉責めが始まった。

武内と松志田は正友の言葉が信じられないでいたが、幾(いく)ら叫んでも手下達の反応がないのを見て、大介と沙織に倒されてしまったと解釈(かいしゃく)せざるを得なかった。

数を頼みに勝負をしようとしていた武内と松志田は、逆に自分達が追い込まれたのを自覚し、顔をひきつらせていた。

「沈めッ!!」

そう言って秀樹がビッグウェーブランチャーを出すと、

「消し飛べ!!」

と言って、正友が神楽龍姫(かぐらりゅうき)を手に武内と松志田に翔(か)け寄った。松志田が猛吹雪でバリケードを作り、自分達の身を守ろうとしたが、正友はあっさりとそれを薙(な)ぎ払い、それを見た武内がアイスニードルを投げたが、これもまた打ち落とすと二人に一撃を加え、風を操(あやつ)り空へと舞(ま)い上がらせた。

二人を舞(ま)い上がらせた風は竜巻(たつまき)となり、更にその渦(うず)の中には無数の攻撃が練り込まれていた。凄(すさ)まじい遠心力の中にいる松志田と武内は防御(ぼうぎょ)もできず、なされるがままに竜巻(たつまき)に身を任(まか)せるしかない。

そんな松志田達を翻弄(ほんろう)する竜巻に向け、秀樹のビッグウェーブランチャーの照準(しょうじゆん)が合わされていた。

「沈めッ、双竜大哮破(そうりゅうたいこうは)!!」

正友の竜巻でポコポコにされた二人が、その渦(うず)の頂点に達すると、その激しい渦の外に弾(はじ)き出され、宙に投げ出されたようになった。ほんの一瞬だが無重力状態に陥った二人。

しかし、もはやボロボロで三半器官(さんはんきかん)の麻痺(まひ)している二人は、なす術(すべ)もなくビッグウェーブランチャーの的となるしかなかった。

秀樹の放つ強烈な砲撃(ほうげき)を受け、武内達がさらに空高く吹き飛ばされたのを確認すると、秀樹と正友は松志田達の落下地点へと向かった。

「へえ～...タフな奴らだな。オレ達の奥義を喰らってんのに、まだ気を失ってないのかよ。」

「多分、氷の内力(メキド)で自分達の体を覆(おお)ったんだろう。」

「そういう事か、さすが秀さん。」

秀樹と正友を前に武内は起き上がれずにいたが、顔だけを向けて声を震わせながら話しかけた。

「こんな所にいつまでも居ていいのか...?」

「!?...どういう事だ?」

意味深な武内の言葉に、眉(まゆ)をひそめる秀樹。

「我らの別動隊が既に詩音様の所へ向かっている。お前達の仲間が今頃どうなっているコトか...楽しみ...だな...」

武内はそう言い残し、気を失った。

「おい、ソイツらは何者なんだ?」

「よせ正友。もうコイツらは気を失ってる。」

武内の胸ぐらを掴(つか)み、問いつめようとする正友の行為を、そう言って秀樹が止めた。

「あ、あの...」

何か言いたげな大介。

「何か知ってるのか?大ちゃんさん。」

「う、うん。さっき空飛んでたら、知らん誰かとすれ違ったんやけど、強そうやった。」

「それを早く言ってくれよ〜。」

大介の少し天然な所を知ってるだけに、責めも出来ない正友は、そう言って嘆(なげ)くしかなかった。

「そんな事を言っても仕方ない。どんな奴らだったんだ？」

と言って、話を切り換える秀樹。

「あのな...デツかい犬みたいなとな、男が二人おったんよ。」

大介は阿波(あわ)弁(べん)まる出しにそう答えた。

「...そうか。おそらく二人の男というのは、ここに転がってる四天王の残りの二人で、犬みたいなのは、きのう俺達を襲ってきたケルビムだろうな。まあ、あっちには十分な警護(けいご)をつけているから大丈夫だとは思うんだが...。とにかく急いで戻ってみよう。」

秀樹は自分が戦ってみた手応えで、はるか達が大介と入れ違いに向かった男達の襲撃に負けたりはしないと判断したが、何か心に引っ掛かる点があり、急いで引き返す事にした。

—その頃。

はるか達の前に、大介とすれ違った男達の一人が現れていた。

「伍籐(ごとう)...さん？」

川瀬(かわせ)の闇から顔を出した男は、昨日、はるかに取材を申し込んだ伍籐と名乗る自称(じしよう)ジャーナリストであった。

「何故ここに...!？」

そう言いながら、はるかは普通ではない伍籐の目つきに身構えていた。

「あなたは悪い人だ。あんな凄い力を持っているのに普通の女子高生のフリをして...今日こそはあなたの力を撮(と)らせてもらいますよ。」

「あなた...いつから見てたの？」

「フフフ。昨日、あなたのお連れさんが派手(はで)に暴れてたじゃないですか。それも収めましたが、やはり現役の美少女女子高生の方が特ダネになりますからね〜。」

「あなた、どうかしてるわッ!」

伍籐の異常な言動と雰囲気(ふんいき)に、はるかは思わずそう言ってしまっていた。すると洋一が、はるかにその尋常(じんじょう)でない伍籐の感じは、おそらく何者かに操(あやつ)られているのではないだろうかと言(じよげん)した。

「さあ、あなたの力。試(ため)させてもらいますよ!」

伍籐はそう言うと、みるみる筋力を増し、倍の大きさくらいまで体を大きくした。それに伴(とも)って顔つきも狼(おおかみ)のような輪郭(りんかく)と鋭(すど)い眼光(がんこう)とになり、おぞましい化物に変身してしまった。

「ヤバいッスよ....。」

功一はその姿を見て、驚(おどろ)きを隠(かく)せないでいた。はるかは詩音を鮎吉に託(たく)し、自ら戦おうとしたが。洋一と広介と功一が三人がかりで迎え打つとって対峙(たいじ)したが、そこへ昨日現れたケルビムらしき巨大な野獣(やじゅう)が割って入り、洋一達は不意を突かれ、退避(たいひ)せざるを得ずにいた。

その獣(けもの)をよく見ると、背に白づくめの鎧姿(よろいすがた)の騎士(きし)が立っていてこう叫んだ。

「貴様(きさま)らの相手はこの剣(けん)次(じ)様と、ブリザードウルフがしてやる。」

「あなたが氷の四天王なの?」

「左様(さよう)。」

はるかの問いに、剣次は笑いながらそう答えた。

「おとなしくその少女を渡せ! そうすれば命までは取らん。」

傲岸不遜(ごうがんふそん)な態度に一

「フザけるなッ!!」

洋一はそう叫び。彼の号令一(ごうれい)下(いっか)、功一と広介が揃(そろ)って剣次に戦いを挑(いど)んだ。

「ガルルルル...グオー！！」

伍籐は完全に自我(じが)を失い、獣のように闘争本能(とうそうほんのう)をむき出しにして、はるかに襲いかかってきた。

獣人(じゅうじん)と化した伍籐のスピードと跳躍力(ちょうやくりよく)は凄まじく、一瞬にしてはるかの背後を取った。そして、鋭く伸びた親指の爪(つめ)で引っ搔(か)こうとした。

すんでの所で躲(かわ)したはるかだが、その先の地面は大きく削(けず)れ、くっきりと刻(きざ)まれた爪跡(つめあと)はすぐさま凍結(とうけつ)していた。はるかはフレアクロスで反撃(はんげき)し、十数合(じゅうすうごう)撃ち合うと手に痺(しび)れを覚えた。

「ファイアービュート(火焰鞭)!!!」

はるかは戦法(せんぽう)を変え、伍籐から距離(きょり)を取りミドルレンジから燃えさかる鞭(むち)で攻撃(こうげき)を始めた。柔(やわ)らかくしなる鞭(むち)の打撃(うちげき)は見切り(みきり)にくく、伍籐は防戦(ぼうせん)一方(いっぽう)となった。

じれた伍籐は強行突破(きやうこうとつぱ)を試(こころ)みたが、反対(はんたい)に鞭(むち)の強烈(きやうりやう)な打撃(うちげき)の餌食(えじき)となり、道半ば(みちなば)にして進め(すす)めなくなってしまった。強(きやう)じんな肉体(にくたい)も、はるかの繰(く)り出す打撃(うちげき)の威力(ゐりき)の前(まへ)には到底(とうてい)及(およ)ばず、蹲(うずくま)ったところで一気(いっけい)にはるかは懐(ふところ)へ飛び込み(とびこみ)、左手(ひだりて)にある伍籐の首(くび)をガードの上(うへ)から締めつけた鞭(むち)を引(ひ)くと、態勢(たいせい)が崩(くず)れて隙(すき)ができた下(した)っ腹(はら)に渾身(こんしん)の正拳突(せいけんづ)きを浴(あ)びせた。そしてすかさず横腹(よこはら)にミドルキックを放(はな)つと、伍籐は吹き飛(と)んでいった。

「まだやるつもりなの？」

はるかはそう言って伍籐(ごとう)をキツく睨(にら)んだが、おぞましい変身(へんしん)は解(と)け、すでに伍籐(ごとう)は氣(き)を失(う)ってしまった。

それを確認したはるかは、矢継(やつ)ぎ早(ばや)に洋一達の戦っている方へ向くと、それに気付いた剣次はブリザードウルフと共に空に待機(たいき)するように翔(か)け昇った。

「メテオカリバー!!」

洋一達の攻撃の射程圏外(しゃていけんがい)へ逃れた剣次へと向かい、大剣を手に翼(つばさ)を出して飛び立ったはるか。剣次はその斬撃(ざんげき)を腰(こし)に帯びた刀を取り出し受け止めると、こう呟(つぶや)いた。

「フッフ...倒したな。」

「!?...どういう意味？」

「我らが王から授(さず)かった内力は、真の所有者へと帰還(きかん)する。後ろをしてみろ！」はるかは剣次の言葉に耳をかさないでいたが...

「な、なんだ!?これはッ...。」

何かに驚いた洋一の声がし、はるかは後ろを振り返った。すると、洋一達のだいぶん先の斜(なな)め前方に倒れている伍籐の体から、雪の結晶(けっしょう)のようなオーラが抜け出し、それが凄まじい勢いで詩音の元へ向かうと、彼女の体の中へと吸い込まれていった。

「あれは一体...？」

「我らが王は復活なされた。礼を言うぞ、小娘ッ。ハハハハハハッ...」

うろたえるはるかに、剣次はそう言って高笑いをした。だが、詩音の瞳がうつろで氷のように冷たい色合いをしたのを見て、はるかは動揺(どうよう)してしまい、その光景を茫然(ぼうぜん)と見ているばかりで何も耳に入っていないようであった。

「詩音ちゃんよ!どうしたのじゃ...!？」

詩音の傍(かたわ)らで彼女を警護(けいご)していた鮎吉が、心配そうにそう言いながら肩に手をかけ意識を確認しようとしたのだが...

「ぐおッ!?!…」

詩音の肩に触れた途端(とたん)に鮎吉は手に激しい痛みを感じ、叫んでしまっていた。蹲った鮎吉が痛みの走る手を見ると、その手は凍りついていて、しかし、そんな鮎吉を見ようともせず、詩音はただ黙(だま)ってその場に佇(たたず)んでいる。

「…行かなきゃ。」

意味深な言葉を残すと、詩音がその場から消えてしまった。

「詩音ちゃんツ!!」

一同が驚く中。はるかが詩音の名を叫び、彼女が姿を消した空間に翔け寄ったが遅きに失(しっ)していた。自分の力が及ばず詩音を見失ったと思い、膝(ひざ)を落として悔(く)やむはるか。

「ぐう～…覚えてろよ。」

はるかが悲嘆(ひたん)に暮れている間に、意識を取り戻した伍籐がそう言ってブリザードウルフに飛び乗った。「はっ」としたはるかが、慌てて後を追おうとしたが。

「目的は果たした。さらばだ！ハハハハハハハ…」

剣次の笑い声が川闇に笈(こだま)すると、その気配と共に闇に溶け込むようにして彼らは消え去った。

「どうしよう…」

そう言って崩れ落ちるようにして、再び座り込んでしまったはるか。

「一体どうしたというんだ？はるか。」

はるか達の元へ戻ってきた秀樹が、そう言って声を掛けたが、囲りを見て詩音の姿がないのを悟(さと)りー

「遅かったか…。」と、漏(も)らした。

塞込むはるかケアするのは洋一達に任せ、詳(くわ)しいいきさつを訊(き)く事に秀樹は専念した。そして大体の内容を把握(はあく)すると、はるかの元へ向かい、ゆっくりと話しをしだした。

。

誰が話しかけても茫然(ぼうぜん)としていたはるかであったが、秀樹の声を聞くとうつむき加減で泣きそうな瞳で見つめ返し—

「お兄ちゃん...わたし...」

と、声を奮(ふる)わせながら言葉にならない戸惑いの言葉を発した。

「もう何も言うな。お前のせいじゃない。」

優しい秀樹の言葉に、ホッとしたはるかが瞳に涙を滲(にじ)ませた。

「おいおい...そんな悲しそうな顔をするな。」

女の子の涙を見て、困惑(こんわく)した秀樹はぶっきらぼうにそう言った。いつもの事だが、言葉は心の中と全然違う事を言えると考える秀樹は、直接的な労(いたわ)わりや優しさの感情を指す表現を用(もち)いず、理路整然(りろせいぜん)とした内容ではるかの心を落ち着かせようとした。

「詩音ちゃんの身に何があったかは、本人ではないので断定的な事は言えんが...詩音ちゃんの体に入った冷たいオーラというのが、何らかの影響(えいきょう)を与えたとしてもだ、詩音ちゃんは洗脳(せんノウ)された訳でも操られた訳でもなく、何か思い出したかのように自ら姿を眩(くら)ましたと聞く。四天王とか言ってた奴らは、詩音ちゃんを崇(あが)めてはいても危害を加える意図は見えなかった。詩音ちゃんの安全はひとまず約束されているような物だ。だから、今はとりあえず様子を見る事にしよう。」

「でも...」

「でも何だ？」

「お兄ちゃんは知らないだろうけど、昨日の伍籐って人が詩音ちゃんを連れ去りに来て、スゴく怖いバケモノみたいになったの...もう理性とか吹っ飛んでしまってるみたいな感じで...。このまま行けば、詩音ちゃんも人間でなくなっちゃうんじゃないかなと思うと、不安でたまらないの...」

「それは心配ないだろう。」

「?...なんで分かるの？」

「伍籐とやらが変わり果てた姿になったと言うのは、今しがた師匠(ししょう)に教えてもらったんだが。昨日の今日で予想もつかない状態に変貌(へんぼう)した事から察するに、メキド(内力)が暴走したんじゃないんだろうかと俺は思う。」

「暴走...？」

「ああ。昨日の午前中にお前が会った時はまともだったんだろ？それが今晚おかしくなって現れた。詩音ちゃんがこの徳島にいるのを知り追ってきた奴らと、何かの形で伍籐は接触し、そこで本来の自分のルーツに目覚めた。世間には知られてないお前の秘密を嗅(か)ぎつけたと聞いた時に、何かしらの力を秘めてるから出くわしたのではないかと俺は思っていた。伍籐の先祖もどんな理由があったのかは知らないが、“氷の一族”とかいう群れから、詩音ちゃんの先祖と同じように離れたんだろう。まさかこういう展開になるとは思わなかったが...。メキド(内力)を授かった時に力が暴走したのと、今までの話にどういう関連性があるのかと言えば、原始の炎から宇宙(うちゅう)創生(そうせい)は始まり、その熱は未だ現代に至るまで大小様々な生物や物質を生かし続けていて、その種火というか、一端(いったん)が人間にも残っていると説明前にしたよな？」

「...うん。」

「その仕組みを考えれば、俺達の生命というのも、ずっと昔から親の親とかを辿(たど)れば、原始の力。つまりは宇宙創生の力を受け継いでいるってコトになる訳だ。だから、理論上は俺達のメキド(内力)も、ビッグバン級の力を得られる訳なんだが。かと言って俺達の身体が宇宙になるってコトはないだろ？」

「...そうね。でも、宇宙になるのとバケモノになるのとは違うんじゃないのかしら？」

「確かにお前の言う通りだ。俺がメキド(内力)の暴走といったのは“先祖返り”のコトなんだ。」

「先祖返り...？」

「ああ。人間や動物でもよくあるだろ？人間であれば猿(さる)だった頃の名残りとか、恐竜(きょうりゅう)とかの名残りとかもあるという学説もあるくらいなんだぞ。伍籐は昨日までは普通の人間と思っていたのが、予期せぬ外部からの力を受け、一時的にそのショックで細胞(さいぼう)とかがおかしくなったんじゃないかと俺は思っている。」

「何故、そう思うの？」

「俺達は日頃から力を使ってるが、体に変調を来たしたりはしない。そうだろ？」

「...うん。」

「それに加え、伍籐から抜け出たオーラが詩音ちゃんに移行(いこう)したら、奴は元に戻ってたって言うじゃないか。何故だか意識だけは違ってみたいだが、それ一つを取ってみても、詩音ちゃんがバケモノになる心配はないと思う。ビッグフッドなど、旧人類を復活させ使役(しえき)してるのが目に移ったから、あんな風になってしまうのではないかと危惧(きぐ)してるんだろうが、あれは人間が自分達と遺伝子(いでんし)的にあまり変わらない猿やチンパンジーを、ペットにしたりしてるのと同じだと考えるのが妥当(だとう)だろう。まあ奴らは、一般的な人間とは少し掛け離れてはいるようではあるがな。」

「どの辺りが？」

「筋力が普通の人間よりもだいぶ優(すぐ)れているように見える。動体(どうたい)視力(しりよく)とかもな。運動能力が発達しているみたいだから、体の作りが少し違うという点では、奴らが“氷の一族”と人類との種の違いを言い立てるのも、あながち嘘(うそ)とも思えなくはないな。でもまあ、丸つきり違う訳でもないし、“異民族”くらいの受け止め方でいいんじゃないのか。だから余計な心配はしないで、今日は帰って体を休め、また明日にでも事後策(じごさく)を検討(けんとう)するでしょう。分かったな！」

「...うん、分かったわ。」

秀樹の分析力(ぶんせきりよく)や洞察力(どうさつりよく)はとても深く、はるかはもちろんの事、他の者達も到底及ぶ所ではないのは誰もが認める所であり。彼が一つのテーマで口を開けば、聞いた者は他に疑問があったとしても、その事すら言う気もなくなる程の説得力を持っている。

今の話一つを取ってみても、伍籐の人格が変わった事に対し、何故(なぜ)そうなったのか分からないでいたので、詩音はどうなるのか等、はるかはあれこれ聞いたかったのだが。伍籐の体の変化が元に戻った事に対し、現場に居合わせないのに、周りの話を聞いただけで、こうも見事な意見をする秀樹が安心するよと言っているのであるから、何も心配する事はないという思いにならざるを得なかった。

自分の考える事など、既に秀樹の事だから考えている事であろうと思ったし、秀樹が分からず答えられない事を、自分がいくら考えてみた所で解決など出来る筈もない。何事にも動じない秀樹の芯(しん)の強さが、深い思考力を彼にもたらし、その深い思考力で人間と世の中を見据(みす)えられるがゆえに様々な者の立場を理解し優しくもなれる。

鮎吉が秀樹を頼もしく思い、口にした言葉の意味を、はるかは自分なりに理解しようとしていた。秀樹の深い思考力や優しさは何がその発端(ほったん)になっているのかと紐解(ひもと)けば、鮎吉の言った“心の強さ”であり、その心は幾度(いくど)もの試練(しれん)に立ち向かい、乗り越えたからこそ培(つちか)われた物であると言いたかったのであろう。

まだ幼かったはるかは、二十代前半の秀樹がどんな苦境(くきょう)に晒(さら)されていたのかは知り得ないでいたが、相当に精神的に追い詰められたに違いないと思った。体を酷使(こくし)しなければスタミナや筋力が付かないように、精神力も苦難(くなん)に陥(おちい)らねば、心を鍛(きた)える事ができないと思ったからである。

前伝承者のまゆみは、その一線(いっせん)の攻防に脱落(だつらく)してしまったのだろうか？そんな過去の事は分かる余地(よち)もないが、少なくとも秀樹の人を想う心の強さは、戦いだけの強さだけではなく、人格的にも社会的存在としても、全ての面において彼を輝かしい高みに昇らせていると思った。

だが、自分は秀樹とは違い、どんな力にも屈せず、人の道や道理からブレない知恵深さを得られるのかと言えば、そうは行かないとも思い、鮎吉が言うような正しい道を行けるのかどうかと考えると、不安にもなっていた。

先の事など考えても仕方がないのではあるが、いずれ来るであろう試練に、自分は耐えられるのか？自立した青年達の和の中にあって、人間としてまだまだ未熟(みじゆく)なはるかには、周りがすごく立派(りっぱ)に見え、どうしても比較(ひかく)してしまい、余計に自信が持てなくなっていた。

～次章へ続く～

バトルボーラーはるか
第二集 氷の美少女
第3章・失踪

<http://p.booklog.jp/book/64191>

著者：Ψ(Eternity Flame)英 樹(はなぶさ いつき)
著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/eternal-spirit/profile>
ブログ <http://profile.ameba.jp/jjmmd123/>

編集・更新：Ψ(Eternity Flame)秋乃空(あきのそら)
ブログ <http://profile.ameba.jp/battleballer-haruka/>

感想はこちらのコメントか秋乃空のブログへお願いします
<http://p.booklog.jp/book/64191>

ブックログ本棚へ入れる
<http://booklog.jp/item/3/64191>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー (<http://p.booklog.jp/>)
運営会社：株式会社ブックログ